

膝に絡む草を掻き分けながら、草原の斜面を下っていた。散歩の途中、ほんのちょっとした思いつきで登ってしまった神山の山頂で、景色の中に小さく眺められた村のお寺に心惹かれた私は、発作的にその寺院を目指してフラフラと道の無い山の斜面を下り始めてしまったのだ。毎度の事だが自分がいつ突然何処に向って行こうとするのか自分でも判らない。まったく旅に出ている時の私は、予測不能な自身の行動についていくのも大変なのだ。

案の定、いくら草地に覆われているとはいえ、道なき山の斜面を下るのはそんなに楽なものではなかった。山頂からはハッキリと目視できた村のお寺は、山を下るにつれ視界から消えていき、後は当てずっぽうにそちらと思われる方向目指して、一面草むらが広がるばかりの斜面を歩き続ければ、山頂からは然程でもないように思われたお寺までの距離も、山ひだが重なり折りたたまれた地形をなぞれば、そこそこ結構な道のりだと判明し、尾根の谷間でいつからそこにあるのか、すっかり白く乾いた水牛の骨が散らばっているのに遭遇した時には、まるで自分が草でできたアリ地獄の中に落ち込んでしまったような不安な気分も一瞬胸を横切って、いったい自分は中国の奥地までやって来て、何故こんな場所を一人さまよっているのかと疑問と自嘲の入り混じった気持ちが湧いてきて苦笑したりしているうちに、突然目の前が開けてくると、ポンと湿地帯の平地に降り立つ事ができた。

山裾には細い小川が流れていて、このあたりの地質の関係なのか水の中には赤い石ばかりがたくさん散らばっている。旅の思い出に手頃な一つを拾いリュックに放り込むと、ぬかるんで歩き難い湿原の中でどうにか乾いている場所を探しながら、目指す方向に歩を進め、やがて小さな橋がかかっている場所に辿り着くと、そこからは目指していた村が目の前の高台に見えていた。

やった！やった！！山の上から眺めていたこの場所まで、ちゃんと来る事が出来たんだ～～！！

この日の朝は失望でしょんぼりしていた私が、心の中で快哉をあげていた。

川を渡った先は小さな農道のような小道で、村の高台に至る緩やかな斜面にはほんのささやかな畑が作られ、目指すお寺はその高台の外れに建っていた。

本当に小さな村だった。両手の指で数えられる程の数少ない家も過疎が進んでいるのか、人の住んでいる気配が感じられないものもある。

私が目的地であるお寺に向かって、畑の脇の道を登り始めた時だ。余所者が村を訪れた気配に気付いたのだろうか、畑の上に建つ家の窓からおばあさんが顔を覗かせ、我が家の方向に向ってくる私を見ていた。

ちょっぴり緊張した。観光客の多い土地柄ならいざ知らず、こんな場所まで入ってくる外国人などそうはいないだろう。この村での私は完全に得体のしれない余所者だ。土地の言語など判らないので、とにかく明るい声で「ニーハオ！」と叫んで手を振り、怪しい者では無い事をアピールすると、おばあさんは、サッと再び窓の中に姿を消した。

畑の脇の道を登りきると村の中を通る一本道だ。もう間近にせまっている寺院はその先にあり、そちらに向って道を歩き出そうとしたその時、道の脇に建っていた先ほどの家のドアが開くと、何処からか見ていたのか、まるで急いで中から出て来たような様子のおばあさんが私に向って声を上げた。

土地の言葉なので何を言っているのか判らなかったが、様子から察すればどうやらこっちに来いと言われていたようだ。訳が判らないままオズオズと近づいていくと、おばあさんは私に家の中に入るようにと仕草で促した。

え？・・・何で???

躊躇はしたが特に逆らう理由も無く、訳の判らないままに恐る恐る家に足を踏み入れると、中ではハイハイを始めた年頃の赤ちゃんが先を柱に結んだ紐につながれて遊んでいる。そんな屋内の光景にちょっと安堵した私が、勧められるままに床に座ると、おばあさんは部屋の奥から水の入ったグラスとチベット族が常食としているチベットパンを運んできて私に差し出した。

・・・???

なぜ自分がこの家に呼び込まれたのか全く訳が判らなかった。だが、おばあさんは私に水とパンを勧めると、満足そうに私の向かい側に座り、後は、孫をあやしなからチベット族の老人達の誰もが持っているハンドル式のマニ車を手にして回しながらニコニコしているだけで、それ以上の用事は何も無いといった様子なのだ。

ぼんやりしている私に、おばあさんは再び食べ物を勧める仕草をして笑顔を見せた。

もしかしたらこれは・・・私を家に招いてくれたの？ただ道を歩いてきただけの、言葉も通じぬ異邦人の私を？ゆっくりと疑問が解けたような気がしてきた時、私の胸は温かい気持ちに包まれ始めた。

質素な部屋が二間だけの小さな家だった。おばあさんがパンを取り出してきた部屋の片隅には竈があり、きっとそこが台所なのだろう。家具といえるようなものは殆ど何もなかったが、二間続きのとなりの部屋は片側の壁一面が床から天井まで届く祭壇となっていて、ダライラマの写真や小さな仏像や蝋燭や、その他仏教に関する色々な物がこまごまと並べられ、素朴な電気仕掛けで自動的にクルクル回り続けるおもちゃの様なマニ車も置いてある。祭壇の片隅には、日本では既に見かけなくなった旧式のカセットデッキが置かれ、そこからは静かで単調な音楽が流れていた。

となりの部屋にはおじいさんも座っていた。何やら裁縫台のような機械の上で一心に縫い物をしている様子だ。家に入ってきた異邦人の私に全く興味を示すそぶりも無く、淡々と無心に作業を続けていた。

言葉の通じないおばあさんと私は、ただお互い微笑ながら向かい合って座っていた。このおもてなしに何か答えたかった私は、ザックの中からもう残り少ない折り紙を取り出して鶴や花を折り手渡すと、おばあさんは感心した様子で面白そうに眺めていたが、小さな赤ちゃんは私がズボンのポケットから取り出した鏡の方が気に入ったようで、私から鏡を取り上げると不思議そうに何度も覗きこんでいる。この子のお父さんとお母さんは、祖母に孫を預けて町に働きに行ってるのだろうか？

斜面の上の高台に建てられた家は日当たりが良く気持ち良かった。聞こえてくるのはおばあさんが絶え間なく回しているマニ車の軋む音と、おじいさんのコトコトと縫い物をつづける音、ラジカセから聞こえてくる静かな音楽だけだ。

何の警戒心も無く他者を家の中に招き入れ、午後の柔らかな日差しの中で愛らしく遊んでいる孫を微笑みを浮かべ見守る老女と一心に仕事を続ける老翁。家の中は穏やかさに満ちている。行きずりの見知らぬ他人の家で、私の気持ちは安らいでいた。

それにしても・・・

真っ白な長い髪を女学生のように三つ編みにした、小柄な可愛いおばあさんは、何かやっている時以外はずっとマニ車を手にしている。まるでそれを回す事が生活の一部となっているようだ・・・そんな事を思っていてふと気がついた。祭壇に置かれたラジカセから絶え間なく流れている、単調で静かなメロディを繰り返すこの調べは、音楽では無くお経なのだ。

この家の中にはごくごく自然に生活の一部として、信仰が満ち溢れているようだ。きっとこのお経は、毎日々朝から夜まで流れ続けているのではないだろうか。何も無い質素な部屋に、祭壇だけが大きく設えられたこの家で、おばあさんは日がな一日お経を聴きながら、こうしてマニ車を回して過ごしているのだろう。

その暮らしぶりは決して経済的に豊かそうではないが、見知らぬ他人を我が家に引き入れ、もてなして笑顔を見ているおばあさんの顔は幸せそうに見えた。理塘で過ごした時にもチラッと感じていた事だが、そんなおばあさんの様子を見てみると、やはりこの土地での信仰は娯楽と一体を成しているものなのだろうと確信に近い思いがした。

近年になって下界の文化が流入してくる以前には、娯楽など存在し得えない厳しい自然環境の中でつましく生きるチベット高地の暮らしは、敬虔な祈りである信仰が心の拠り所であり最上の娯楽でもあったのではないだろうか？ そう考えれば人生の中の数年をもちかけ、五体投地で地を這いながら巡礼の旅に出ることも厭わない人々の気持ちも理解できるような気がした。ことに長い人生を生き抜いて自身の役割を果し終えた老人達の生活では、その殆どを占めているのが神への信仰なのであろうと、この老夫婦の暮らしぶりを垣間見て感じられ、以前観た事のあるチベットの映画が思い出された。

紆余曲折を経て激動の人生を生き抜いた老夫婦が、人生の終盤を信仰に捧げながら穏やかに暮らし、その生涯を終えていく姿が描かれていたその映画に、目の前の二人の姿が重なるような気がした。(続く)